

天竜川・遠山郷の自然および土地利用の変容-序説-

Changes of Nature and Land Use at Toyama Valley in the Tenryu River -Preliminary Considerations-

星 川 和 俊
信州大学農学部

Kazutoshi HOSHIKAWA
Faculty of Agriculture, Shinshu University

Key words : 遠山郷, 農業的土地利用, 厳しい自然, 流域変化

Toyama Valley, Agricultural Land Use, Severe Natural Conditions, Change of Valley

I. はじめに

近年、流域環境保全に当たって、水源から河口、さらには沿岸海洋をも含む、水系一貫による環境保全策の必要性が認識されつつある。つまり、国土保全や水資源涵養、さらには豊かで安定した流域環境保全のためには、(1)水源から下流に至る全流域での多様な土地利用の空間特性、(2)水循環の諸過程と流域内部の土地利用特性の時空間変動、(3)水循環と土地利用技術の統合・考察が緊要な研究課題となっている。従来、このような研究では、都市の立地する河川下流側からの事例が多く、河川上流域の森林や中山間地域での水・土地利用が有する環境保全機能を適正に評価してきたとは言い難い。

わが国の河川上流域は、山岳・中山間地域など国土面積の70%以上の面積を占め、ここでは個性豊かな自然環境、農林業などの土地利用が混在・展開してきた。したがって、上流側流域での環境調節や保全機能を解明することは、極めて重要となる。

II. 研究目的

筆者らは、天竜川の水源地の一つであり、厳しい地形と水文条件の中で伝統的な水・土地利用を守っている遠山郷を研究対象として選び、主として農業的土地利用から見た上流域の流域保全機能を調査、検討することを目標として、平成8年から現地での聞き取りや土地利用調査、気象観測などを実施している。

調査対象の遠山郷は、南アルプス南端の山間の秘境に位置し、伝統的な農林業が現在も細々と続けられており、これらの水・土地利用技術が、南アルプス山麓の水源地保全に少なからず貢献していることは、容易に想像できる。しかし、山村の高齢化・過疎化に伴う土地の荒廃

も確実に進行中であり、しかも道路網の急速な整備による大規模な開発も懸念される。

このような状況において、伝統的な山村の農業的土地利用や技術が流域環境保全に寄与してきたメカニズムや因果関係を明らかにすると同時に、上流域での農林業の衰退が流域全体の水循環に及ぼす影響を検討し、上流域から見た河川整備への総合的な考察を行うことが緊要な課題である。よって、本論では総合的な検討への予備的な考察として、遠山郷の魅力を醸し出してきた隔絶的な地勢条件、あるいは生業の史的な変化、ならびに最近の遠山農業の変化を既存文献や調査、統計資料からの検討結果をとりまとめる。

III. 遠山郷の地勢と山村

1. 位置

本研究の対象である遠山郷は南アルプス南部の西麓と伊那山脈の東面傾斜地に挟まれた地域である。遠山郷の地勢は、図1のとおりであり、伊那盆地最南端部にある天龍村平岡付近の左岸で天竜川に合流する支流の遠山川流域一帯である。東から南は赤石山脈で静岡県と画し、西は伊那山脈で伊那盆地と、また北は地蔵峠を境として大鹿村と隔てられた山間の溪谷であり、長野県北部の秋山郷と共に、代表的な秘境となっている。

遠山川は、河川延長39.3kmと比較的短いが、上流から上村、南信濃村、天龍村にまたがる342.5km²の流域面積の多くは、南アルプス南端の山岳が氷源域であり、洪水や傾斜地崩壊等の自然災害の常襲地帯でもある。

2. 遠山山村の概要

遠山郷は、現在の下伊那郡南信濃村と上村からなる遠山川に沿った谷の総称である。両村共に、村面積のほ

とんどが山地や原野で、極めて狭小な平地と山間傾斜地での農業に依存する山村である。かつて、明治 29 年に

的にも山間の傾斜地がほとんどで畑地が数倍多い。集落は、河川近くの狭小な平坦地と比較的気候条件の良い南

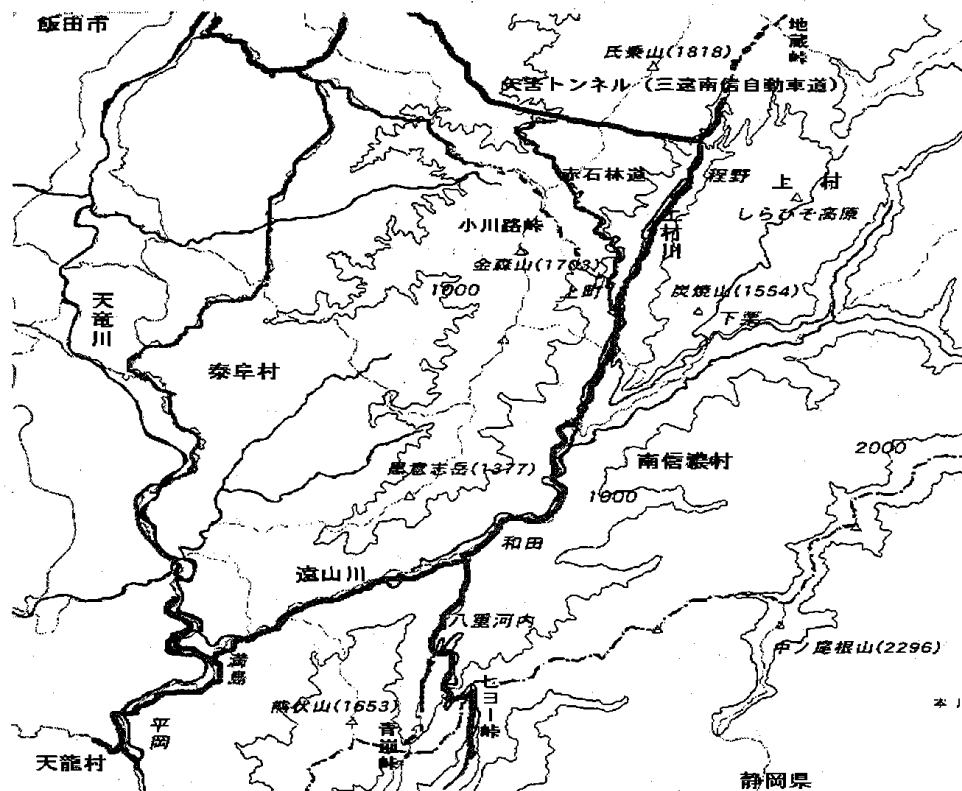


図1 遠山郷の地勢と道路網

王子製紙が村に入り、大規模な森林伐採が行われ、林業による隆盛をみたが、現在ではその面影さえない。

遠山郷の山村状況を述べるために、精査対象地域である上村を例として説明する。上村は、遠山郷の最奥に位置し、遠山川とその支流である上村川に沿った面積 126.79km² の村である。南アルプスの雄大な景観が眼前にせまり、遠山川の溪谷や山腹斜面に山村集落が点在する美しい村である。

上村の土地構成は、山林や原野が約 60%と圧倒的に多く、田畑は 0.7%とわずかである。田は遠山川や上村川近くの水利条件の恵まれた平坦地に存在するが、地形

向きの山腹斜面に散在する。

村の人口は、1999 年 2 月現在、男 386 人、女 433 人の計 819 人で世帯数 321 戸の小さな村である。近代の村の人口推移をまとめた結果は、図 2 に示すとおりである。大正末期ならびに戦後直後には、2500 人近くの村民がいたが、現代では 1/3 に減少し、過疎化が進行する状況にある。加えて、高齢化割合 (65 歳以上人口 / 全人口) が 36.5%、老年人口指数 (65 歳以上人口 / 15 ~ 64 歳の生産年齢人口) も 72.2%となっており、高齢化の傾向は、一層厳しい状況である。

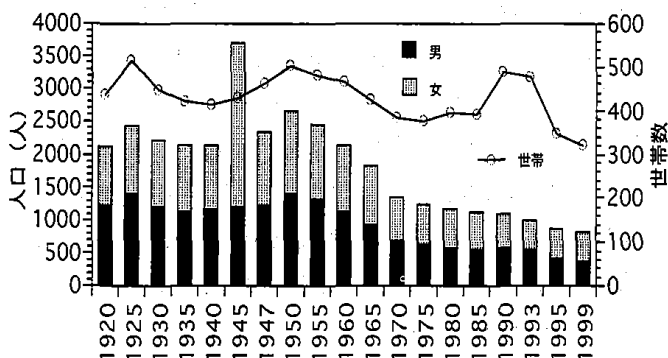


図2 上村の人口と世帯数の推移
(国勢調査他、なお1999年は4月1日時点)

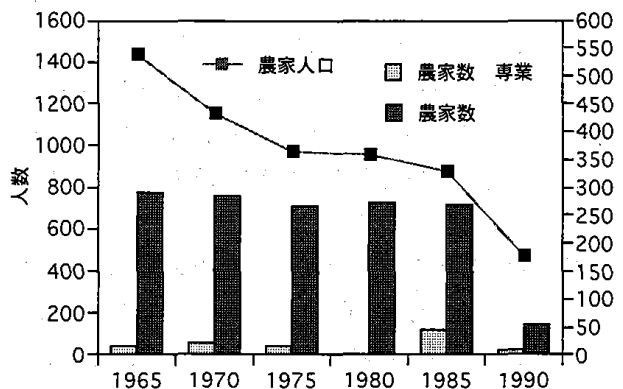


図3 農家人口と農家数 (上村,1990)

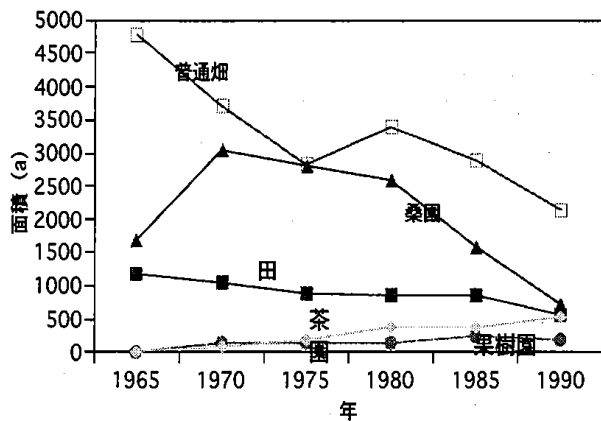


図4 経営耕地の種類別面積 (上村, 1990)

村には、とくに大きな製造業等もなく、主な産業は農業である。しかし、地形条件から狭小な耕地しか得られず、1戸あたりの経営耕地面積は25aと狭小で、主として畑作を中心とした自給的な農業が営まれている。

上村の農業変化を見るために、図3に農家人口と農家数の推移を、図4に経営耕地の種類別面積の移り変わりを示す。上村においても、わが国の他の農業地域と同様に、農家人口や経営耕地の減少は認められるものの、その傾向はこの20年間に著しく進む状況にある。多くの農耕地は、急傾斜地にあり、圃場整備や機械化などによる農業労働の軽減も難しく、農業者の高齢化に伴って、伝統的・山間農業の持続は益々困難になりつつある。

IV. 水害と土砂災害の常襲地帯

遠山郷は、背後に南アルプスの壮大な山々を控えた谷間の山村である。したがって、ほとんどの地域が山岳急傾斜地である上に、遠山郷のなかを中央構造線が通っており、土砂崩壊、地滑り等を受けやすい脆い地形である。また、気象条件的にも太平洋側に近く、梅雨前線や台風等による集中豪雨の影響を頻繁に受けてきた。この結果、遠山郷は古くから水害と土砂災害の常襲地帯であった。

遠山郷南信濃村出身の後藤総一郎氏は、遠山郷の水害について、次のように説明している。『南アルプスを背にした、いやその深い山々に刻まれた深い谷間を流れる一条の遠山川に沿って形成されたのが、今日の遠山の里であるあることを思うとき、自然の恐怖としての“水魔”の急襲とその戦いの歴史は、この里に当然のごとく運命的に担わされてきたものであったのだ。』

同様に、上村下栗での民俗学的な調査を行った浮葉正親氏は、『遠山谷には数多くの山神碑が残されています

が、その中には「山の神・水神」と2つの神に名が並んで刻まれているものが少なくありません。(中略) 漁師や山師(山林労働者)が山中で山の神を祀る時などにも、2本のオタカラ(弊束)を捧げるものとされていました。

赤と白の半紙を2つ折りにし、竹串にはさむ簡単なオタカラで、赤が山の神を、白が水神を表すと言われています。』あるいは『遠山谷の近代史は山林の伐採による水害の頻発、そしてそれとの戦いという、山の神=水神の「祟り」とそれへの「鎮め」の歴史だったといっても過言ではありません』と述べている。

両氏の指摘は、歴史的かつ民族学的な視点からのものではあるが、水魔や水害あるいは土砂災害が遠山郷の史的側面のみならず、人々の生活、文化などにも大きく影響を与えてきた鋭い考察であろう。

水害等の直接的な原因として、梅雨前線や台風等による豪雨がきっかけとなることは十分に予想されるが、大きな水害に拡大した誘因について、後藤総一郎氏は、以下のような、流域の変貌の歴史的な要因を指摘している。

江戸時代以降の樽木(徳川幕府への年貢用の一定規格の木材)用山林の大量乱伐、

明治29年から大正11年までの王子製紙によるパルプ材他的大量伐採、搬出

戦時用資材(飛行機や船舶等)の大量搬出

昭和20年代の下流ダム(梨元ダム 昭和22年、

平岡ダム 昭和27年)建設による河床上昇、

国有林(奥地)の大量伐採などである。

表1には、近代以降に発生した主な水害や土砂災害の様子をまとめた。現在でもしばしば災害が発生しており、その危険が今も続いていることは容易に想像できる。前述の江戸時代以降のたび重なる森林の大量伐採、搬出等による水源の荒廃が、現在の水害に影響を及ぼしていることも十分に推察される。残念なことに、このような水源林の破壊を定性的かつ定量的に知る調査・分析の報告はない。

遠山を訪れたとき、後藤総一郎氏らが指摘するような大量伐採の跡を、直接的に見ることは少ない。現在では、伐採跡にマツやスギなどの植林地が広がり、かつての禿げ山を想像するしかない。しかし、これらの植林地においても、十分な森林管理がなされているとは限らず、下刈り、間伐等が行き届かず、高密度に徒長した植林地

であったり、雑草が生い茂り植林地内に立ち入ることさえ難しいものも多い。

表1 遠山郷における近代以降の主な水害の状況

西暦	和 歴	水害 ・ 土砂災害等の状況
1868	明治元年 7 月 2 日	大洪水
1897	明治 30 年 9 月	遠山川大水害（護岸工事の施工を王子製紙に申し入れ）
1922	大正 11 年 7 月 5 日	遠山川大増水被害甚大
1934	昭和 9 年 9 月 21 日	室戸台風被害多し
1938	昭和 13 年 7 月 1 日	大豪雨（人家数戸流失，死者 3 名）
1945	昭和 20 年 10 月 4 日	豪雨（枕崎台風）により被害甚大（家屋 17 戸流失，死者 1 名）
1948	昭和 23 年 6 月 19～20 日	デーラ台風
1953	昭和 28 年 7 月 19 日	キティ台風により被害大（大洪水により消防団員 2 名殉職）
1959	昭和 34 年 9 月 26 日	伊勢湾台風による被害，災害救助法発動
1961	昭和 36 年 6 月 26 日	梅雨前線による豪雨（大町部落 11 戸流失）
1965	昭和 40 年 9 月 17 日	24 号台風の被害甚大（激甚地災害救助法の適用，13 戸流失）
1968	昭和 43 年 8 月 29 日	10 号台風の被害甚大
1974	昭和 49 年 7 月 4～15 日	台風・梅雨前線（上村 死者 2 名）
1975	昭和 50 年 12 月 10 日	大雨（上村 地滑り）
1979	昭和 54 年 10 月 18～19 日	台風による大雨（南信濃村 堤防 162m 決壊）
1983	昭和 58 年 9 月 28～29 日	台風による大雨（南信濃村 道路の決壊）
1985	昭和 60 年 6 月 24～25 日	梅雨前線による大雨（上村，南信濃村 土砂崩壊）
1989	平成元年 9 月 2～4 日	前線による大雨
1998	平成 10 年 10 月	台風による大雨（南信濃村，土砂崩壊）
2000	平成 12 年 9 月	前線による大雨（上村，南信濃村，橋脚流出，土砂崩壊）

南信濃村誌「遠山一」，ならびに飯田測候所 100 年誌等より，上村と南信濃村の災害記述がある場合から作成。

V. 地域の伝統と隔絶性

上村の遠山民俗誌によると，遠山の名称は鎌倉時代の『東鑑』（文治 2 年 1186 年）の条に『江儀遠山在』と記されていることに始まるとされている。元和年間に遠山家の断絶後，江戸幕府の領地となり，寛文・延宝年間の検地頃より，門村と称し，和田村，木沢村，八重河内村と共に，向関宮崎代官所の支配下にあったが，その後

飯島代官所に，明治 2 年廃藩置県により伊那県となり，同年筑摩県の管轄となった。

明治 8 年，上村，和田村，木沢村，八重河内村を合して遠山村となった。明治 14 年和田村のうち南和田が分離したが，同 22 年町村制実施とともに和田村外 4 カ村組合となり，70 年の長きにわたって続いた。その後，昭和 22 年に上村は独立し，現在に至っている。

遠山郷には、遠州の秋葉神社に通ずる秋葉街道が通っており、上村は信州からの参拝の人々ための玄関口であった。秋葉街道を通じて、東海地方や上方の先進文化も入り、かつては信州への移入文化の一つの拠点でもあったという市川健夫氏の指摘もある。しかし、近代交通体系である鉄道や自動車道の発展の中で、遠山郷はその厳しい地形条件から取り残された。遠山郷に入る主な道路の状況を示すと、すでに示した図1のとおりである。

伊那谷の中核都市の飯田とは、距離にして20km程しかないが、自動車で行き来できるようになったのは、昭和43年に赤石林道が開通してからのことである。この結果、飯田と上村間が1時間余りで結ばれた。それまでは、天竜川の下流である平岡を経由して、遠山川を北上するという数時間を要する難ルート、あるいは1500m内外の伊那山脈の峠路を徒歩や馬で越えるしかなかった。

最近では、三遠南信自動車道矢筈トンネルの共用が平成6年に開始され、飯田と上村間を1時間弱でつないでおり、遠山郷の隔絶状況は解消されつつある。

以上のように、遠山郷は、地形条件や交通網の整備の遅れによって、周辺地域と比較的最近まで隔絶されてきた。この結果、地域固有な文化、生活、生業などに、伝統的な姿を残し続けている。たとえば、1000年以上の歴史をもつと言われる無形文化財『霜月祭』を代表とする伝統的な文化が、今なを継承されており、民族学上で多くの関心が持たれている地域となっている。したがって、遠山の伝統的な文化・民族学的な研究も数多い。

隔絶された山村での自給的農業に注目し、そこでの生業形態、生活や技術面からの農業に関する調査も行われてきた。市川健夫、八田二三一、野中健一らの各氏による、文化地理学的な地域農業と生活誌に関する研究で、遠山郷の農耕空間や栽培様式の展開、農耕を通しての自然認識を明らかにしようとするものである。これらの研究の中には、遠山郷が南アルプスの広大な森林をもつ水源地域であり、自然・山村での生活・生業が地域の自然に対して、相互に交渉をもちつつ、伝統的な地域文化を形成してきたという指摘もなされてきた。

隔絶状況にあった遠山郷を対象とする従来の調査・研究は、民族学的、人文地理学的な観点からのものがほとんどで、必然的に地域文化や生活誌の伝統や特徴の分析に焦点が当てられてきた。南アルプスを背後に控えた厳

しい環境下での、遠山郷の農業が厳しい自然条件にどのように適合し、それらが流域の環境保全にどのように寄与してきたかを、明確に調査、考察したものは少ない。

目前に迫りつつある山村の老齢化・過疎化に伴う土地の荒廃、あるいは急速に進展しつつある道路整備の中で、大規模開発も懸念され、遠山郷の伝統的な農林業と流域保全の関係を早急に調査、再認識することが重要である。

VI. 遠山農林業の変化

1. 概要

すでに述べたように遠山郷の主たる産業は、農業である。しかし、本地域は急峻な山岳と、その間に形成された谷間の地形という厳しい条件から、農業適地も少なく、零細な自給的農業が古くから行われてきたにすぎない。

両村共に、1戸当たりの経営耕規模が20数アール程度の小規模経営であること、また耕地の中で畑地の割合が多いことに特徴がある。遠山郷の地勢条件から、水田域は遠山川と上村川の河道周辺の限られた平地にしか立地しない。しかも、両河川ともに上流溪谷の様相を呈し、極めて狭小な水田適地があるのみである。

2. 農業の変貌

日本各地で発生している現代的な農業の諸問題と、上村の農業も無縁ではない。急傾斜地という厳しい地形条件であり、しかも零細規模の自給的農業という性格から、一層厳しい現実的な問題として、顕在化する状況にある。

図5は、上村における集落別農家数の最近の推移を示したものである。農家数は1985年まで大きな変化がないが、1990年の調査からはほぼ半減している。減少率は、集落によって異なるものの、各集落ともに減少傾向は明らかである。

同様に、図6に示した上村の集落別農業就業人口の推移を見ると、1970年から調査年毎に、就業者が減少し、1990年にはほぼ半数となる。

図7は、各集落における経営耕地の種目別面積の推移を示す。すでに述べたように、水田が存在する集落は程野、下中郷、表町、東町の上村川沿いの谷底部にある集落であるが、畑地、樹園地などは、いずれの集落においても大きい面積を占める。経営耕地の減少の時期は、集落により異なるものの、いずれの集落でも、1970年から1995年までに30%~70%に及ぶ減少率となっている。

集落別の作目別収獲面積の推移を表した結果が、図8

である。下中郷、表町、東町などは狭小ではあるが、水

ないこと、過疎化による農業の担い手の減少、ならびに

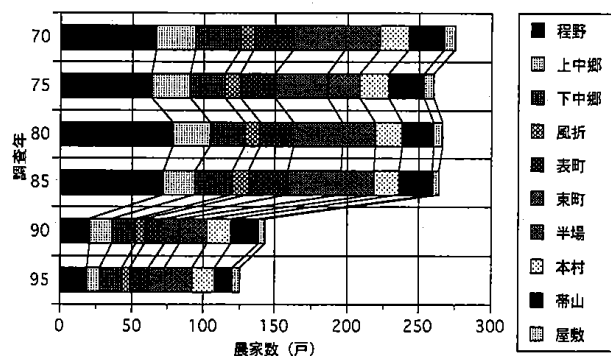


図5 集落別農家数の推移（上村，農業センサス）

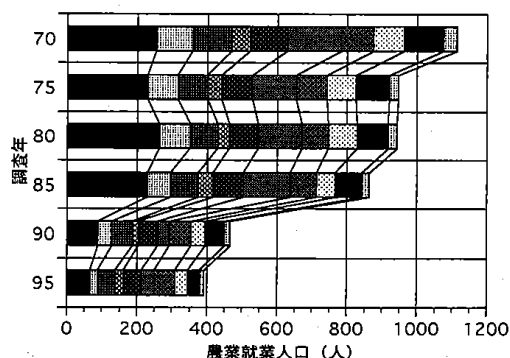


図6 集落別農業就業人口の推移（上村，農業センサス）

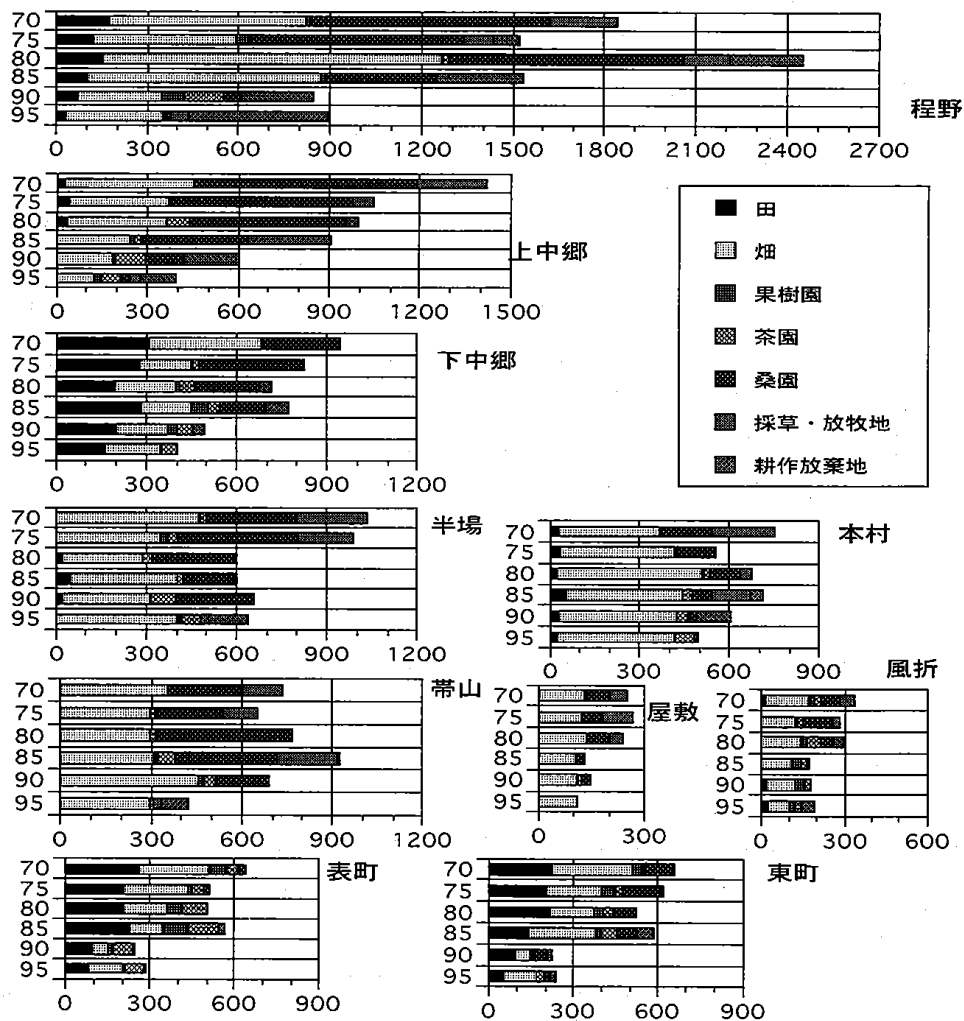


図7 上村集落別経営耕地種目別面積の推移（単位:a,農業センサスより）

稲作が行われており、比較的収穫率も高く、収穫面積の減少率も小さい。しかし、麦、雑穀などの畑作を主に栽培する集落では、作物別収穫面積の年次変化の割合が大きく、収穫面積の急激な減少につながっている。

以上に見てきたように、遠山郷の農業の衰退は、1980年代を中心として急速に進行しつつある。この原因には、厳しい地形条件の中で、耕地整備や機械化が容易に進ま

老齢化の問題などが大きいと考えられる。この結果、図9に示すように、急速に耕作放棄地が拡大する状況もみられる。

なお、図9にある程野、上中郷等の大きな耕放棄地率の直接的な原因は、近年の道路（国道158線や矢筈トンネル等）改良や拡幅、あるいは道路通過に伴う地目転用などによるものが多い。したがって、劣悪な耕作条

3. 林業の盛衰：共有山の事例

遠山郷の近代化において、遠山共有山の利用・開発にまつわる経緯は、この地域の森林資源や林業のみならず、村社会や村民の生活、あるいは人々の価値観にまで、大きな影響を与えた。また、木材資源や山林労働者の輸送のための索道・道路整備などが始まり、このことが、閉ざされた遠山郷と周囲の外部社会とを結ぶ契機となった。

共有山開発の歴史的事実については、南信濃村村史・遠山に、また、種々な村落社会や人々の精神的な風土に与えた影響については、遠山物語—ムラ—の思想史（後藤総一郎著）に詳しく検討されている。

南信濃村村史によると、共有山の利用・開発経緯は次のとおりである。遠山郷の広大な森林は、戦国時代にこの地を治めていた遠山氏の改易後（1617年）、天領となり御留山であったが、代官所の管理下で樽木の搬出が行われてきた。しかし、旧遠山6ヶ村の百姓達の嘆願によって、江戸時代の中期中腹以下の数力所が百姓稼山として、入山が許されるようになった。百姓稼山は旧遠山6ヶ村の共有林として経営され、遠山地域の社会的結合の経済的基盤となった。その後、明治の地租改正で一時公有地となったものの、明治12年には、遠山5ヶ村の1万町歩の共有山として管理が行われるようになり、本地域の近代化の中で大きな財産となった。

その後、当時の村の有力が、村民の知らない間に、共有山の伐採権を売り渡し、この権利が転売されることとなった。50年期限の伐採権を得た王子製紙による大規模伐採が開始されたのは、明治29年である。この伐採は、ほぼ20数年に及び大正11年の操業停止まで続けられた。その間に、山の良材はほとんど採り尽くされたという。

王子製紙の操業時代が終わり近づいた大正時代には、主として外部資本の山林製材業者も流入し、製材業、製炭業を始めた。中でも、岐阜県の川金木材は、程野を中心とした王子製紙の残余の立木を買い取り、山林開発に関与した。

王子製紙など外部資本の入山によって、共有山の権利売買の事実が村民に明らかとなり、村内部に大騒動を引き起こした。また、人口4500人の貧しい村に、1500

人もの現金収入を得る山林労働者が定住するようになり、遠山郷の村社会や村民生活は、急速な近代化へと大きく変貌した。

外部資本による共有山の森林伐採・山林開発は、周囲を山で閉ざされ遠山郷の木材資源の搬出や労働者の輸送のために、索道、鉄道、道路網の整備の引き金となったことも事実である。現在においても、遠山郷の交通体系の整備は最重要な課題となっているが、遠山郷の農林業と交通輸送網の歴史的経過なども踏まえた、慎重な交通体系の計画が必要となる。よって、表2には主として、共有林の開発・林業と交通輸送網の歴史的経過を年表にまとめた。

VII. あとがき

本研究では、天龍川上流の遠山郷を対象とする現地ならびに資料調査から、伝統的な山村の背景にある厳しく豊かな自然と土地利用の変容について、既存資料や検討結果をとりまとめた。さらに、近年の農業的土地利用の変化の一端を検討した。

現在の遠山郷は交通条件の厳しさから辺境の地としてのイメージが強いが、長野県内でも多品種・伝統的作物の栽培地帯としてよく知られている。ところが、この村は彼らのかげがえのない財産である森林資源の開発によって、最も早く近代化の荒波の影響を受けた地域でもある。しかし、その後は近代的な交通輸送網の整備の遅れの結果、伝統的な山村農業を細々と継続させ、貧しいながらも村を支えてきた。

現在、交通網の整備・進展が遠山郷の山村にまで及びつつあり、再び近代化の荒波がこの地域を変えつつある。同時に、山村農林業においても、担い手の高齢化が確実に進行しており、植林地・耕作地の放棄・荒廃化の危機が確実に迫りつつある。上村：下栗のような過酷な労働が必要などころでは、急激に問題に直面する可能性も大きい。

具体的な検討は今後の課題であるが、遠山郷での生業技術や生活スタイルを総合的に見たとき、これらは大きな力となって流域保全のベクトルとなっているように感じる。

表2 遠山郷の林業と交通輸送体系の歴史

年	代	事 項
	江戸時代	樽木の搬出
1618	元和4	遠山氏滅亡。天領となる。 御留山制となり入山禁止
1638	寛永15	塩買木（樽木）の給付
1674	延宝2	「百姓稼山」指定され、入山許可される。中腹以上は御料所として入山禁止。
1873	明治6	地租改正により、「百姓稼山」は公有地となり、入山禁止。 「百姓稼山」周辺での民有地としての届け出（旧遠山6ヶ村、1万町歩）
1879	明治12	山の中腹以下から私有地境まで、木沢・上・和田・八重河内・南和田の5組合村の「共有山」となる。
1879	明治12	大鹿村大久保源造らに、本谷、池口、梶谷、熊伏等 600ha の共有林（17種の良木）、伐採期限6ヶ年で売却。
1881	明治14	同上の伐採期限を明治30年6月まで延長。
1883	明治16	同権利 東京市燐寸工場新燧社清水誠に転売。
1883	明治16	同権利 松本市小松彰に転売。
1887	明治20	同権利 京都東本願寺大谷光勝に転売。
1895	明治28	同権利 飯田市黒田忠一に転売。 村と伐採期限50年の年延契約。
1895	明治28	同権利 王子製紙に転売。
1896	明治29	王子製紙池口地区の伐採開始。
1897頃	明治29頃	王子、三井、川金、秋田木材等の企業による本谷北沢での山買い。
1897	明治30	乱伐による大水害。王子製紙護岸工事の約束。
1917	大正6	川金 程野に製材工場設立。
1919	大正8	竜東索道会社設立
1922	大正11	王子製紙全山での操業停止。大洪水
1923	大正12	伊那電気鉄道 辰野―飯田間開通
1923	大正12	竜東索道（小川路―氏乗―程野間開通 16km, 2.5 時間）
1927	昭和2	伊那電気鉄道 天龍峡まで延長
1929	昭和4	竜東索道 小川路―元善光寺まで延長
1932	昭和7	川金 程野の3製材所の閉鎖、従業員300人の引き上げ
1937	昭和12	飯田線全線開通 和田―満島―平岡経由の陸上輸送
1941	昭和16	竜東索道の運転停止
1941	昭和16	和田―満島―平岡の車道拡幅（3.6m）
1943	昭和18	下伊那自動車和田―遠山口間のトラック営業開始
1944	昭和19	王子製紙地上権を東京新田源一に譲渡。
1944	昭和19	長野県知事裁定により、共有山地上権が村へ返還。しかし、村に買収金がなく与志本合資会社と立木売買契約（昭和37年3月）の上、肩代わり。
1944	昭和19	遠山森林鉄道開通（梨元―大沢渡）
1947	昭和22	上村、組合村から離脱
1956	昭和31	遠山森林鉄道開通（梨元―北又渡間 10.9km）
1962	昭和37	共有山の地上権、村に返る。
1968	昭和43	赤石林道（飯田―上村間）開通 上村―飯田間 約1.5時間
1971	昭和46	遠山森林鉄道廃止
1994	平成6	矢筈トンネル（三遠南信自動車道）開通 上村―飯田間 約50分

南信濃村村史―遠山―、遠山物語―ムラの思想史―、伊那谷山村の変貌、竜東索道―盛衰とその時代―から作成。

引用文献

- 南信濃村村誌編纂委員会：南信濃村村誌-遠山，P.733，昭和51年
- 上村民族誌刊行会：南信州・上村 遠山谷の民族，P.449，昭和52年
- 喬木村教育委員会編：竜東索道 盛衰とその時代，喬木村教育委員会，P.111，平成10年
- 後藤総一郎：遠山物語—ムラの思想史—，信濃毎日新聞社，P.366，昭和54年
- 浮葉正親：遠山川流域の民族とふるさとイメージの創造，語りつく天竜川，P.48，平成9年，建設省中部地建天竜川上流工事事務所
- 八田二三一：長野県遠山郷における伝統作物の栽培—下栗地区の例—，東京学芸大学地理学教室，P.66，1986
- 市川健夫：日本のチロール 遠山郷，地理36（12）1991
- 市川健夫：遠山郷のもつ魅力—信濃風土記6— pp.56-63
- 野中健一：長野県下栗地区における山村生活誌—昭和20年代の農耕を中心に，北海道大学文学部紀要41-2，pp.1-32，平成4年
- 野中健一：長野県下栗地区における山村生活誌—昭和20年代の食生活を中心に，北海道大学文学部紀要42-1，pp.127-149，平成5年
- 上野福男：急傾斜地の研究，農業技術研究所 H2号 pp.61-74，昭和26年
- 小木曾豊：中央構造線地帯における土地利用—大鹿谷・遠山谷—，pp.9-15
- 三浦宏：伊那谷山村の変貌：P.207，信濃教育会出版部，1988
- 飯田測候所百年編集委員会：飯田の気象百年，日本気象協会長野センタ，平成9年